

(提言)「シチズンサイエンスを推進する社会システムの構築を目指して」
インパクト・レポート

1 提言内容

(1) シチズンサイエンスの知識生産活動への拡大に向けた広報活動

日本では、市民科学の取り組みを支援するシステムが構築されているが、知識生産をテーマとするシチズンサイエンスを広げるシステムの構築は途上である。今後、シチズンサイエンスをより一層拡大し、日本の学術の発展へと繋げていくためには、シチズンサイエンティストを、知識生産を目的とする研究へ動機づけるための施策や、既に動機づけられているシチズンサイエンティストを集約するシステムの構築が必要である。そのためには、シチズンサイエンスという営みを広く周知することを、まず始めなくてはならない。そこで、大学や学協会等は、シチズンサイエンスの存在および、その魅力を周知する広報活動を行うため、サイエンスカフェ等の取り組みを活用することが望ましい。そして、文部科学省および関連省庁は、一連の取り組みを主導するサイエンスコミュニケーターの雇用やイベント開催の予算的措置を進めるべきである。また、職業科学者は、サイエンスコミュニケーターにシチズンサイエンスの推進をすべて任せるのではなく、科学者自身が市民と一体となるシチズンサイエンスをより一層推進していく必要がある。

(2) シチズンサイエンスの研究倫理を保持する基盤整備

現状では、シチズンサイエンティストの研究倫理について、その教育や審査を行う基盤整備が十分ではない。シチズンサイエンスの拡大に際し、シチズンサイエンティストに対して、シチズンサイエンスの窓口となる大学、研究所、学協会、NPO 法人などの組織は、研究倫理基盤をはじめとした、更なる基盤の整備を進めるべきである。その際、日本学術会議による「科学者の行動規範」の周知と連携することも必要である。

(3) シチズンサイエンスを推進するための社会連携の基盤整備

科学コミュニケーションにおけるモデルの変遷に鑑みると、シチズンサイエンスの今後の発展のためには、日本でも職業科学者とシチズンサイエンティストの双方向性を備えたコミュニケーションの場が不可欠である。しかしながら、現状では、職業科学者とシチズンサイエンティストの橋渡しによる双方向性のあるシチズンサイエンスを推進するための社会連携の基盤が十分に整備されていない。学協会は、主催する学術集会でシチズンサイエンティストの発表を奨励し、双方向性を備えたコミュニケーションの場を提供すべきである。また、このような企画を立案、運営する委員会を設置し、社会連携の基盤整備を進めるべきである。

(4) シチズンサイエンティストの活動を支援する研究資金制度の確立

シチズンサイエンティストの活動を支援する研究資金制度について、現在、社会課題解決型の研究を助成する資金制度が存在する。これに対し、知識生産を目的とした研究を行

う際に、シチズンサイエンティストが研究代表者として申請できる柔軟な使用用途が認められる助成制度が必要である。文部科学省および関連省庁は、シチズンサイエンティストの研究を支援する研究資金制度を確立することが望ましい。職業科学者はシチズンサイエンスの重要性を認識し、社会課題解決型以外の研究に対して、現在の研究費制度にシチズンサイエンティストによる研究を組み込むことを推奨すべきである。

2 提言等の発出年月日

令和2年9月14日

3 フォローアップ（提言を浸透させるための提言者側のシンポジウムや出版等の活動）

- 文部科学省とシチズンサイエンスの普及・拡大に向けての協議を重ねている。一連の議論に合わせる形で、シチズンサイエンスの概念を広く市民に周知することを企図し、関係有志により『みんなで作ろう「1万人のシチズンサイエンス」』と題するワークショップを2021年のサイエンスアゴラの企画として11月3日に実施予定である。
- Japan Open Science Summit 2021の企画セッション「学術会議若手アカデミーと考えるオープンサイエンス」（2021年6月18日実施）のなかで、「心理学におけるシチズンサイエンスの展開」という話題提供を行い、提言発出によって学協会が進んだシチズンサイエンスを紹介した。
- シチズンサイエンスをテーマとした番組制作等に向けた公開ブレインストーミングがNHKで行われ、岸村前若手アカデミー代表が提言を紹介した。
- 日本学術会議とGlobal Young Academyが共同主催で実施する国際会議（2022年6月12-17日、九州大学にて開催予定）において、シチズンサイエンスを主題とするセッションを企画している。

4 社会に対するインパクト

(1) 政策への反映

①・無

2021年3月26日に閣議決定された第6期科学技術・イノベーション基本計画に反映された。特に以下のような形で触れられている。（該当部を太字と下線にて強調）

(p. 14) (3) Society 5.0の国内外への発信・共有・連携

今後のポストコロナ時代の世界秩序模索の期間において、我が国が国際社会をリードするために、新たな社会モデルと価値、そして、それを実現するための戦略を言語化し、“Society 5.0”として国内外に具体的に問いかけていく。

国民に向けては、様々なメディアや共創の場等の活用により、多様なセクター間の対話と協働を促すなど、科学技術・イノベーションへの関心を不断に高めるための情報発信をはじめとする努力を継続し、市民参画による社会問題の解決やシチズンサイエンスを活性化させていく。

(p. 59) …さらに、このような研究活動の変革や我が国全体の雇用慣行の変化によって、研究者の在り方も変わる面があり、既に世界各地では見られる、シチズンサイエンスとしての市民の研

究参加や研究者のフリーランス化など、多様な主体が研究活動に参画し活躍できる環境が我が国でも実現し、研究者とそれ以外の者が、信頼感を醸成しながら、知の共有と融合を進め、新たな形での価値創造を実現する環境整備を図っていく。

(p. 61) ③研究 DX が開拓する新しい研究コミュニティ・環境の醸成

○地方公共団体、NPO や NGO、中小・スタートアップ、フリーランス型の研究者、更には市民参加など、多様な主体と共創しながら、知の創出・融合といった研究活動を促進する。また、例えば、研究者単独では実現できない、多くのサンプルの収集や、科学実験の実施など多くの市民の参画(1万人規模、2022年度までの着手を想定)を見込むシチズンサイエンスの研究プロジェクトの立ち上げなど、産学官の関係者のボトムアップ型の取組として、多様な主体の参画を促す環境整備を、新たな科学技術・イノベーション政策形成プロセスとして実践する。 【科技、文】

(2) 学協会・研究教育機関・市民社会等の反応

(a) 学協会

- 日本心理学会にて関連シンポジウム開催（2020年10月24日）「3つのシチズン・サイエンスプロジェクトと認定心理士ーシチズンサイエンスワークショップ開催の説明会も併せてー」
- 日本心理学会にて関連ワークショップ開催（2020年12月12日、2021年1月16日、2月6日）「シチズンサイエンスワークショップ」
- 日本バイオマテリアル学会の学会誌「バイオマテリアル」(39巻第3号、2021年7月発行)所収の特集「SDGsからみたバイオマテリアル」内の記事「SDGsを支える科学者・研究者コミュニティになるために」（執筆者：岸村顕広）に本提言が引用された。提言内容に基づく学協会へのメッセージが書き込まれている。

(b) 研究教育機関

- 2021年4月1日、福岡大学商学部にシチズンサイエンス研究センターが設立され、当該センターのホームページにおいて本提言が引用・紹介されている。(https://sites.google.com/fukuoka-u.ac.jp/citizenscience/)
- 九州大学社会連携推進室内に理事直下の組織として科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)が設立されているが、Q-STRINGの活動内容の一つに「シチズンサイエンスの推進」が挙げられており、本提言が一定の影響を及ぼしたと考えられる(参考資料：公開シンポジウムパンフレット https://cooperation.kyushu-u.ac.jp/sciencecommunication/files/02_A4_science_communication.pdf)。なお、Q-STRINGの活動には本提言執筆者代表である岸村が関わっていることから、今後の活動に提言内容が反映されることが期待できる。

(c) 市民社会等の反応

- 日本版 AAAS 設立準備委員会の社会連携ワーキンググループ内にシチズンサイエンスユニットが設置され、様々なステークホルダーを交えてシチズンサイエンス推進に関わる議論が開始された。

5 メディア

- シチズンサイエンスをテーマとした番組制作等のための公開ブレインストーミングがNHKで開催された。それを受け、NHK シチズンラボが開設されるに至った。

NHK シチズンラボ URL: <https://www.nhk.or.jp/citizenlab/index.html>?

6 意思の表出内容において、他の異なる意見との関係性等に変化があれば記載してください。

特になし。

7 考察と自己点検（a-c から一つ選択し、説明する）

(a) 予想以上のインパクトがあった

本提言は第6期科学技術・イノベーション基本計画に反映され、関連したシンポジウム、ワークショップが学協会で開催され、さらに、シチズンサイエンスをテーマとした番組制作のための公開ブレインストーミングがNHKで開催され、社会の関心が非常に高まっている。提言発出時に予想していた以上にインパクトがあった。現在、文部科学省と大規模なシチズンサイエンスプロジェクトの実現に向けて協議を重ねており、シチズンサイエンスを引き続き推進していきたい。

インパクト・レポート作成責任者
若手アカデミー24期代表
岸村 顕広

提出日 令和3年8月17日